

## 網羅的な結論にかえて

経済学者（および他の専門家たち）は、なぜある国が成長して他が成長しないのかについて、ほとんど有益なことが言えないようです。バングラデシュやカンボジアなどの論外と思われる国が、ちよつとした奇跡になつてしまいます。コートジボワールなどお手本級の国が、「底辺の10億人」に落ち込みます。後知恵でなら、それぞれの場所で何が起きたか言い訳を組み立てるのはいつでも可能です。でも本当のことを言うと、わたしたちは成長がどこで起こるかほとんど予測できないし、なぜ突然成長の火花が散るのか、ろくに理解できていません。

でも経済成長は人力と脳力を必要とすることを考えれば、その火花が散つた時には、男女がきちんと教育を受け、十分に食べ、健康で、市民たちが子供たちに投資し、都市部での新しい職探しに子供を送り出せるくらいの安心と自信を感じていたほうが、成長の炎が燃え上がる見込みは高いように思えます。それが起きるまでは、その火花を待つまでのあいだを過ごしやすくする手だてを講じるべきだ、というのもおそらく事実でしょう。悲惨と不満に任せ、怒りと暴力の噴出を許したら、そんな火花が実現す

るかどうかも怪しいものです。どうせ失うものなど何も無いからと、人々が暴れ出すのを防ぐような社会政策は、そうしたとらえどころのない離陸の日を確保するための重要な一歩でしょう。

これがすべて正しくないとしても——もし社会政策が成長とはまったく関係なくとも——今の貧乏人の生活向上にできる限りのことをすべきで、そんな成長の火花を待っているだけではいけないという議論には圧倒的なものがあります。冒頭の章でそうした道徳的な議論は述べました。貧困を緩和する方法がわかっているなら、貧困がもたらす人生と才能の無駄を甘受すべき理由などありません。本書が示したように、貧困を削減する魔法の銃弾はありません。一発ですべて解決の秘法もありません。でも貧乏な人の生活を改善する方法については、ま、ち、が、い、な、く、い、ろ、い、ろ、わ、か、つ、て、い、ま、す。特に、重要な教訓五つが浮かび上がってきます。

まず、貧乏な人は重要な情報を持っていないことが多く、ま、ち、が、つ、つ、た、こ、と、を、信、じ、て、い、ま、す。子供の予防接種の効果についてわかっています。教育の最初の数年で学ぶことに大した価値はないと思っています。肥料をどのくらい使うべきかも知りません。HIVに感染しやすい方法についても知りません。政治家たちが何をやる人もわかっています。抱えている確信が実はま、ち、が、つ、て、い、る、と、ま、ち、が、つ、つ、た、決、断、を、下、し、て、そ、れ、が、時、に、と、ん、で、も、な、い、結、果、を、も、た、ら、し、ま、す——年配の男性と保護なしのセックスをする少女たちや、適正量の2倍の肥料を使う農民のことを思い出してください。自分の無知を自分で知っている場合ですら、その結果として生じる自信のなさが被害をもたらすこともあります。予防接種の御利益について確信がないことと、人間すべてに見られる先送りの傾向とが組み合わせると、多くの子供は予防接種をしても見えなくなりません。何も知らずに投票する人は自分と同じ民族集団の出身者に投票

しがちで、これにより身内びいきと汚職がさらに横行する結果となります。

ちよつとした情報が大きなちがいをもたらす事例はたくさん見ました。でも情報キャンペーンがなんでも有効というわけではありません。情報キャンペーンが機能するには、いくつか特徴が必要です。人々がそれまで知らなかったことを伝えなくてはなりません（「婚前交渉はやめましょう」といった一般的なお題目はあまり効果がないようです）。それも魅力的で単純な方法でやるべきです（映画、演劇、テレビショー、うまく設計された成績表）。そして信頼できる情報源からのものでなくてはなりません（おもしろいことに、マスコミは信頼できると思われています）。この見方の裏返しとして、政府は誤解を招いたり、混乱していたり、ウソだったりすることを言うとき、信頼性を失って巨額の費用を支払うこととなります。

第二に、貧乏な人は自分の人生のあまりに多くの側面について責任を背負いこんでいます。金持ちになればなるほど、だれかが「正しい」判断を代わりに下してくれれます。貧乏人には水道がなく、地方政府が水道に入れてくれる塩素消毒の恩恵を受けられません。きれいな飲料水がほしければ、自分で浄水しなくてはならないのです。栄養満点の出来合い朝食シリアルは買えないので、自分や子供が十分な栄養素を得ていることを、自分で確認しなくてはなりません。退職年金天引き制度や社会保障料引きなど、自動的に貯蓄する方法もないので、自分が確実に貯金するような方法を考案しなければなりません。こうした意思決定はだれにとつてもむづかしいのです。いま考えたり、その他今日ちよつとした費用が必要で、その便益を回収できるのははるか将来のことだからです。だから、すぐに先送り傾向が邪魔になつてきます。貧乏人たちにとっては、人生がすでにわたしたちよりずっと面倒なので、さらに事態は悪化します。多くはきわめて競争の激しい産業で、小事業を営んでいます。それ以外の人々は日雇い労

最後に、人々に何ができて何ができないかという期待は、あまりにしばしば自己成就的な予言に早変わりしてしまいます。きみはカリキュラムを習得できるほど賢くないよ、というシグナルを先生（そして時には両親）から受け取った子供は、学校をあきらめてしまいます。果物商人は、どうせ自分がすぐ借金漬けに戻ると予想しているので、あまり返済努力をしません。看護士たちは、クリニックにいとだれにも期待されていないために、クリニックにこなくなりません。成果をあげるとはだれも期待してない政治家には、人々の生活を改善しようなどとがんばるインセンティブがありません。期待を変えるのは楽ではありませんが、不可能でもありません。村に女性プランドンが来たのを見るだけで、村民たちは女性政治家への偏見をなくしたばかりか、自分の娘も政治家になれるかも、と思い始めました。子供が全員字が読めるようにするだけでいいんです、と言われた教師は、夏期講習キャンペーン一回でそれを実現してしまいます。いちばん重要なこととして、期待の役割を考えると成功はさらなる成功を招くことになります。状況が改善しはじめたら、その改善そのものが信念と行動に影響します。だからこそ、成功のサイクルを開始させるのに必要であれば、モノ（そしてときに現金）を渡すのを必ずしも尻込みする必要はないのです。

こうした五つの教訓にもかかわらず、わたしたちは知り得る、知るべきことをすべて知るにはほど遠い状態です。本書はある意味で、もつと細かく見ようという招待状にすぎません。あらゆる問題を同じ一般原理に還元してしまう、怠惰で紋切り型の発想を拒絶しましょう。貧乏な人たちが自身に耳を傾けて、彼らの選択の論理をがんばって理解しましょう。まちがえる可能性を受け容れて、あらゆる発想、それも明らかに常識としか思えない発想も含めて厳密な実証試験にかけましょう。そうすれば、有効な政策

のツールボックスが構築できるだけでなく、なぜ貧乏な人が今のような暮らしをしているかも理解しやすくなるのです。こうした辛抱強い理解を武器に、本当の貧困の罨がどこにあるのかも見つけられるし、そこから貧乏人たちが抜け出すためにはどんな道具を与えるべきなのかもわかります。

マクロ経済政策や制度改革についてはあまりお話ししませんが、試みが慎ましく思えるからといって誤解してはいけません。ちょっとした変化が大きな影響をもたらすこともあるのです。魅力的なデート相手との話題として、寄生虫の話はなかなか持ち出しにくいものですが、ケニアで在学中に虫下し治療を1年ではなく2年続けた子は（児童1人当たり年に購買力平価で1・36米ドル、全費用込みです）、大人になって毎年2割余計に稼ぎました。つまり生涯で購買力平価3269米ドルです。虫下しが全員に広まったら、この効果は下がるかもしれませんが。虫下しをもらった幸運な子たちは、単に他の人の仕事を横取りできただけかもしれませんが。この数字の規模感を理解するために、最近おもいだせる範囲の近年でケニアが実現した最高の1人当たり成長率は、2006年から08年にかけての4・5パーセントだったことを考えてください。この空前の成長を再現できるようなマクロ経済政策のレバーがあったとしても、平均所得を同じく2割上げるには4年もかかります。そして実は、だれもそんなレバーは持ち合わせていないのです。

貧困をまちがいに根絶してくれるようなレバーもありませんが、それが無いことを認めれば、時間がこっちの味方についてくれます。貧困は何千年も人類とともにありました。貧困の終わりまでにあと五十年か百年待たねばならないのであれば、それはそれで仕方ないことです。少なくとも、何か簡単な解決策があるようなふりはやめられますし、世界中の善意の人々——政治家たちや官僚、教師やNGO

のワーカー、学者や起業家たち——とも手を結ぶようになります。彼らとともに、大も小もいろんなアイデアを探索することで、いづれだれも1日99セント以下で暮らさなくてすむ世界に到達できるので